



# 大本山永平寺



## 解制かいせい

降雪量の多いこの時季、深山幽谷にある永平寺では静寂の日々が淡々と過ぎていくように見えます。しかしながら二月の中旬になると、にわかには慌ただしくなるのです。

二月十四・十五日には、十一月初旬より始まった冬制中ふゆせいちゅう（三カ月の禁則期間）が解かれる解制行持が行われ、永平寺での修行に区切りをつけて送行そうあんする者、更に精進すべく残る者、志を立てて上山する者と様々です。特に昨年上山し丸一年を迎えた者にとつては、今後の進退について大きな岐路に立たされます。

雪の降りしきるなか山門に立ち、これから始まる修行生活への不安や、もう後戻りは出来ないと自らを励まし奮い立たせていたころの記憶が、ふとした瞬間鮮やかに蘇ってきます。新たに上山してくる雲水を迎えながら、これまでの修行を見つめ直す機会が与えられるのです。

徒いとずちに過す月日つきひはおほけれど

道をもとむる時ぞすくなき（傘松道詠）

何気なく生活していると、瞬く間に時間だけが過ぎ去っていきます。修行道場であっても同じことが言えましょう。雲水にとつて大きな転機となるのがこの二月です。



## 大本山總持寺



### 節分会と涅槃会

正月「寒の入り」から約一カ月間、鈴を鳴らし鶴見の街を読経し周っていた「寒行托鉢」が二月二日で終了します。

翌三日には春を呼ぶ「節分追儺式」が大祖堂で盛大に行われ、袈裟の有名人や年男・年女など二千人超の人々が参詣されます。

はじめに江川禪師さまが大導師を勤められての御祈禱法要が行われます。早く勢いのある太鼓のリズムにあわせて般若心経が唱えられ、大般若経をパラパラと転読して東日本大震災被災地の復興や人々の無病息災・心願成就が祈禱されます。

そして法要が終わると、禪師さまの「ふくはうち」の発声を合図に一斉に豆がまかれ、たちまち堂内は賑やかな歓声に包まれます。豆まきが終わると有名人たちによる福引抽選会が行われ、楽しみを更に盛り上げます。

また、十五日は仏教徒の最も大切な日である「釈尊涅槃会」、すなわちお釈迦さまの御命日です。

總持寺では仏殿に大きな涅槃図を掲げ色とりどりの涅槃団子を供えて、禪師さま御親修の「涅槃会法要」が行われます。涅槃会に因んで「報恩摂心会」も十二日から十四日まで修されます。

涅槃会に関する一連の行持が終わると修行に一定の節目をつけ、それぞれの出身地に帰る雲水の姿が見られるのもこの時季の風物詩です。入れ替わりに今月下旬からは新しい雲水が続々と上山してまいります。

親友のやうな妻あり年酒酌む

秋田県 小田 葛恭葉

評 長い年月には夫婦に思わぬすれ違いや諍かたがひい、そして共に負った苦難。そうして今日がある。それらがすべて小さな悟りの数々となり心平に受け止められる気持ち「親友のやうな妻」といわしめるのだ。好い年の始まりのお酒。

村歌舞伎由良さん本酔七段目

東京都 伊奈 三郎

評 仮名手本忠臣蔵。舞台は祇園一力茶屋。由良さん（内蔵助）は芸妓たちと三味線や太鼓に大酒宴。主君の仇討ち、気の有りやなし。世間を欺く放蕩か。家臣等との「心底」を探る攻防。これは村歌舞伎である。呼吸の、ちぐはぐさや掛け声に大きく湧く様が想像される。

◆ 菌みこむ籠かご覗のぞき合あひして無人駅 岩手県 上沖 貞子

◆ 秋深し九十一の生誕日 静岡県 富岡 一郎

◆ 身の回り妻の好みの冬用意 静岡県 池谷 硬司

◆ 種の音よきあんばいに唐辛子 三重県 野呂 と志

◆ 熟れ初めしかりんに夕日加はりぬ 愛知県 田中 澤子

◆ 衣被きぬかぶよその子も居て囲みたり 岩手県 関谷 新一

◆ 落葉踏む音のひとりとなりてゐし 北海道 大野 節子

◆ 菱摘むや舟傾けてへばりつき 新潟県 森村 ひろ

◆ 妻訪ひの道それぞれ草紅葉 群馬県 山本 俊久

◆ 我がからだ軋こもむ音して体育の日 北海道 川上 初子

\* 選者吟

かかる日も我が史に刻み雛の膳

五灰子

\* 作句小見

父母には私を含め四人の子がありながら女の子はありませんでした。父母はおそらく少しは寂しかったのだとは思ったりします。

ちいさなお嬢さん宅にお招きを受け、かしこまりながら頂いた美しい雛料理。そんなとき父母のことを考えました。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

手のひらを揃へて吾は揃ひとる石器時代の  
これは月光つきかげ  
福岡県 三吉 誠

評 あまりに澄んで美しい月の光だったのでろう。この世のものとは思えぬその美しさを原始時代にまで遡らせたところがユニークだ。感動の深さが並々ならぬことを伝える。「手のひらを揃へて」があたかも祈りの形のようにだ。

五十沢いさざわにあんぽ柿吊す家もなく哀れ産地の暮れ  
なんととする  
福島県 大槻 弘

評 三年近く経った今でも、原発事故の汚染問題はなかなか解決しない。あんぽ柿で知られた産地にも、その影は及ぶ。柿を吊るす風物詩の見られぬ寂しさをおして現状を憂う。

◆ ブレーキに足置きかけた直前に蜻蛉せんなはふわりと何処かへ消えた  
山口県 横川美代子  
◆ 終の日の近き虬うづらがおくれ咲く花の温みに身を潜めをり  
北海道 佐賀 ユリ

◆ 母偲おもび小布施で求むる栗羊羹供えて鐘を三つほど鳴らす  
新潟県 星野 三興

◆ 目覚めるや揺り椅子の義母はは咳ひとつ秋陽に透ける障子戸に影  
岐阜県 後藤 進

◆ わずかなる作業に疲るるこの頃は何ふさぎ居ると夫の間ふまで  
山口県 濱田 道子

◆ 団地通りテラスに下がる干柿の一つ一つに秋深みゆく  
山形県 多田 さよ

◆ 「戦時中櫓の木の根がうまかった」と先達の言平和守らむ  
宮城県 小田島麻利

◆ 仕事あり帰る家あり米もある「ほかに望むな」父が咳く  
長野県 毛涯 潤

◆ ゼミ生と二三十人雑魚寝して明日の日本を語るは楽し思ふ  
東京都 野村 信廣

◆ 台風の逸れて安堵の戸を練れば茜の空に鴉群れ飛ぶ  
岩手県 関合 新一

## \* 選者詠

「銃弾が頬かすめて」と語りあう昨日の嵐語  
りあうがに  
ちづ

## \* 作歌小見

かつての沖縄戦、ひめゆり部隊の語り部の方々と立ち話を小耳に挟んだ折の歌。日常的に砲弾の雨が飛びかう恐ろしさ。戦争を知らない世代がほとんどになった今だからこそ、小田島さんの歌の「平和守らむ」は強く叫ばれなければならない。